

5-3. 昨今、気になる自然災害を煽るもの

自然災害は、自然現象が人や物に対して、不都合な負荷を発生させるものです。古来より、このような自然現象に対して、可能な限り抗することなく避けたり、自然のシステムを巧みに活用して、難を逃れるということをしてきました。極端なことを言えば、災害が起きそうなところには居住しない、生活の基盤を形成しないということを伝承してきました。しかし、時代とともに生活基盤の拡大が人口増加とともに必要になり、科学技術も進展し、新しい方法で居住域や生活の範囲が拡大していきます。そして、われわれは大きな災害に遭遇するものの、これまでの技術で克服して、ある程度自信も無意識のうちについてきて、大規模な土地の改変や利便性のあるインフラなどを展開してきました。

しかし、新しい分野でのコストが求められる中、防災だけに集中しての投資拡大することもできないわけで、なんとかここで新たな発想が求められることになってきています。防災は必要がないのが理想で、安心な社会を構成する上で大事なものではありませんが、言い方を変えれば余計な出費になるものです。

これまでは、自然現象はどうすることもできないものであり、自然災害があると異口同音に自然には勝てないということが言われてきました。災害の元である自然現象は人間生活と無縁ではなく、また災害の対象となる人や物にしても、探し出してきて危害を加えているわけでもありません。つまり、自然災害は我々の生活スタイルと深く関係していて、それが災害や被害の規模や頻度あるいは新型の被害の要因に加担しているということが想定されるようになってきています。つまり、自然災害になる要因を人為的に我々が煽っているという面をみえてきます。この煽りという字は、見た通りうちわで火を勢いづけているということですが、そのもとは、自然災害の素因である地形や地質、環境を無視した利活用とか都市集中によるインフラの拡大といった被害対象物の質的变化だったりします。そして、自然現象も毎年同じ状況が周期をもって発生するのではなく、最近では地球温暖化もあって、巨大化、狂暴化しているとも見える変化も明らかになってきています。

例えば、雨の降り方の変化でリスクが増しているのが内水氾濫といわれるものです。最近都市部での自然災害として事例が多くなってきています。これは、河川の水位が豪雨などで上がってくると、下水道から河川へ流れることができずに、逆流したり、吹き上がるために住宅地が浸水したりするものです。川が近くにないのに浸水したといわれるもので、思いがけないことに驚くことがあります。これらの災害は、地球温暖化による局所的な激しい降雨のために下水道の排水能力を超えるために発生するもので、東京都では地下に一時的に貯留する工夫もされていますが、莫大な費用を要し、どこでも簡単に導入することはできません。既存の施設や公有地を利用して貯留あるいは浸透させる方法も検討されていますが実施までには様々な関門もあります。このような内水氾濫は地球温暖化が進んで、気象の変化が大きくなるとリスクは高まります。そのためには、居住地域や建物のかさ上げなどを検討しなければならないし、地域の災害リスクを特定したうえで、住民も万が一の時の避難経路、避難箇所を確認し、正確な情報を得る備えもしておくことがすべての基本となります。